降臨節第１主日　ルカ21章25―31節

［直訳］

25 そして　あるだろう　しるしが
太陽と月と星において、
そして　地の上に
国民の不安が
海の音と揺さぶりの（ゆえの）当惑において、
26 人々は気を失いながら
恐れと　世界に生起することの予感とから。
なぜなら　天の力は　揺り動かされるだろう。
27 そして　そのとき　彼らは見るだろう
人の子が　来るのを　雲の中で
力と多くの栄光と共に。
28 だが始めたら　これらのことが　起こることを
あなたがたは体をまっすぐにしなさい
そして　上げなさい　あなたがたの頭を、
というのは　近づいている　あなたがたの解放が。
29 そして　彼は言った　たとえを　彼らに。
あなたがたは見なさい　いちじくの木とすべての木を。
30 ときは　それらが出す　直ちに、
見ながら　自分たちから　あなたがたは知る　次のことを
すでに　近くに　夏が　ある。
31 このように　またあなたがたも、
ときは　あなたがたが見る　これらのことが　起こるのを、
あなたがたは知りなさい　次のことを
近くに　ある　神の支配は。

［新共同訳］

25 「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。26 人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。27 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。28 このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」
29 それから、イエスはたとえを話された。「いちじくの木や、ほかのすべての木を見なさい。30 葉が出始めると、それを見て、既に夏の近づいたことがおのずと分かる。31 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、神の国が近づいていると悟りなさい。

①構成

ⓐ25―28節

㋐この段落はさらに三つに分けられる。25―26節では、最初の二行で「太陽と月と星」に現れるしるしを書き、最後の一行で揺り動かされる「天の力」を述べ、その間で「地の上」のことを描いている。「国民」は不安に陥り、「人々」は気を失う。

㋑27節では、人の子の到来が語られる。「彼らは見るだろう」の「彼ら」は、25―26節の「国民や人々」だけでなく、28節の「あなたがた」も含むだろう。

㋒28節では、人の子が到来するときは、「あなたがたの買い戻し（＝解放）」の時であるから、「あなたがたは」救いを期待して、頭を上げることができる、と述べる。

㋓この段落全体では、人の子の到来をはさんで、「国民や人々」と「あなたがた」とが対比されている。

ⓑ29―31節

㋐「見る」が各節に1回ずつ用いられる。いちじくの木とすべての木を「見なさい」と命じ、それらが芽を出すのを「見ながら」、すでに夏が近いと知るように、これらのことが起こるのを「見るとき」、「神の支配が近いと知りなさい」と命じている。

㋑「これらのこと」は、25―27節の天変地異と人の子の到来を指すと取ることも、21章8―27節を指すとすることも可能。

②国民の不安（25―26節）

ⓐ25節の最初の二行では「太陽と月と星」に現れるしるしが述べられ、三行目から26節の二行目までに、「地の上」に起こる不安が描かれ、26節の三行目で「天の力」に起こる変異を述べることに戻っている。このような構成から明らかなように、この段落ではしるしとして起こる天変地異が、「国民」に引き起こす不安が強調されている。

ⓑこのことは、並行箇所のマルコ13章24―25節と比較すれば、いっそう明らかになる。

24 それらの日には、このような苦難の後、
　太陽は暗くなり、
　月は光を放たず、
25 星は空から落ち、
　天体は揺り動かされる。

マルコは天体の変化を詳しく記述するが、それが引き起こす不安に言及することはない。ルカは天の動揺よりも、それが「国民」に引き起こす動揺に興味を持っている。「不安」と訳した語（シュノケー）は占星術の用語としても使われ、「天体の悪いしるしによって引き起こされる不安とか狼狽」を意味する。ここでの「国民」は天のしるしによって不安に陥る人のことである。

③人の子の到来（27節）

ⓐ人の子は「雲の中で」来る。この「雲」は人の子が乗る乗り物と取ることも可能だが、神の現存を表す「雲」と考えることもできる。人の子は神として「力と多くの栄光」を携えて、やって来る。その到来を「彼らは見るだろう」。この彼らは、「国民」だけでなく、28節の「あなたがた」をも含むだろう。人の子の到来は誰の目にも明らかな確かな出来事である。

④希望を仰ぐ（28 節）

ⓐこの節の主語はもはや「国民」ではなく、「あなたがた」、キリストを信じる者である。彼らが「体をまっすぐにし、頭を上げる」（詩二四 7 参照）ことができるのは、人の子の到来は彼らの「解放」の時だからである。ここで「解放」と訳した語（アポリュトローシス）は「捕虜や奴隷などを身の代金を支払って買い戻すこと」を表す。レビ 25 章 47 節以下によれば、買い戻す義務を負うのは親戚であったが、神は私たちの親戚のように振る舞い、罪の奴隷となっていた私たちを買い戻すために、イエスを十字架に送った。十字架によって開始されたこの「解放」は、人の子の到来によって完成する。その完成は「近づいている」。この確かな希望を持っているがゆえに、キリスト者は天が揺らいでも、その向こうからのキリストの到来を確信し、頭を上げることができる。

ⓑ解放（アポリュトローシス）

㋐奴隷や捕虜を自由の身にするために支払う「身代金・買い戻し金」を意味する名詞リュトロンから派生した動詞アポリュトロオー〈身代金を支払って買い戻す〉の名詞形。「買い戻すこと・解放すること」、あるいは「買い戻されていること・解放されていること」を意味する。新約聖書では 10 回使われるが、福音書の用例はルカ 21 章 28 節だけである（エフェ 3、ロマ・ヘブ各 2、ルカ・1 コリ・コロ各 1）。

㋑文字通りの意味で「解放・釈放」。ヘブライ 11 章 35 節では、信仰を捨てるなら「釈放」してやろうという申し出を拒み、拷問にかけられた殉教者たちが信仰者の模範とされている。

㋒転義して、神学的な意味で使われる。神がキリストを通して罪や死から人を「解放すること・贖うこと」、または人が「解放されること・贖われること」を表す。この意味でアポリュトローシスを使うのはパウロである。彼は罪を犯して神の栄光を受けられなくなっている人間すべてが「キリスト・イエスにおける贖い」によって義とされると述べる（ロマ三 24）。この「贖い」は、続く 25 節に「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです」とあることから明らかなように、キリストの十字架を表している。

㋓神の恵みが人間に示されるのは、「御子の血による贖い」を通してであり（エフェ一 7）、御子キリストにおいて得られる「贖い」とは「罪の赦し」である（コロ一 14）。新しい契約の仲介者であるキリストは、最初の契約の下で犯された罪の「贖い」として死んでくださった（ヘブ九 15）。それゆえ、1 コリント 1 章 30 節ではキリスト自身が「義と聖と贖い」と呼ばれることになる。

㋔「贖い・解放」は終末論的な意味でも使われる。このときには、「贖い」はキリストの死と復活によって既に開始され、来るべき終末の時にキリストの再臨と共に完成される救いを表す。パウロにとり、終末に現される神の栄光にあずかり、神の子とされることが「贖い」である（ロマ八 23）。キリスト者は聖霊によって証印を押されており、「贖い」によって神の所有物となっており（エフェ一 14）、「贖いの日」が保証された者である（エフェ四 30）。

ⓒ近づく（エンギゾー）

㋐新約聖書では 42 回使われ、ルカ文書の用例が多い（ルカ 18、使 6）。空間的な意味で、あるいは時間的な意味で「近づく・接近する」を表す。

㋑空間的な接近を表す用例。マルコ 11 章 1 節「一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき」を直訳すると、次のようになる。

彼らが近づいたとき　エルサレムに　オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアに

エリコからエルサレムに向かったイエスの一行は、まずオリーブ山の東に到着し、そこから山を西へと越えてエルサレムの町へと下ることになる。つまり、ベトファゲとベタニアはエルサレムの手前の町であるが、マルコはエルサレムを先に置いている。これは「エルサレム」が単なる地名ではなく、イエスの生涯が目指したゴールであり、人間の生き方が根本的に変えられる歴史的な出来事（十字架と復活）の生起する町として見られているからだろう。このように、「近づく」といっても、単に空間的な接近を表すだけではなく、そこで起こる出来事への接近をも同時に表すことがある。

㋒人と人との接近も同様である。ユダがイエスにもとに「来た」のは裏切るためであり（マコ一四42）、徴税人や罪人がイエスに「近寄って来た」のは、神の心を示すイエスのたとえ話に耳を傾けるためである（ルカ一五1）。イエスもエマオの弟子たちに「近づき」、彼らの心を燃え立たせ、目を開かせる（ルカ二四15）。

㋓時間的な接近を表し、何かの決定的な時の到来を示す。それは収穫の時であり（マタ二一34）、イエスの受難の過越祭であり（ルカ二二1）、イエスが引き渡される時などであるが（マタ二六45）、特に救いの時の接近を表す。イエスや弟子は神の国が「近づいた」と宣教し、救いの時の間近さを告げる（マコ一15並行、マタ一〇7、ルカ一〇9）。さらに、終末の救いの時や（ロマ一三12、ヘブ一〇25、1ペト四7）、神が約束した時が「近づいた」ことを表す（使七17）。ルカ21章28節では、人の子が到来する時、つまり、イエスを信じる者にとっては「解放」となる終わりの時の接近を表している。

⑤見て、知る（29―31節）

ⓐ日常の中で目にするいちじくの木を「たとえ」として、イエスは教える。木々が芽を出すとき、それを見ているあなたがたは自分の力で、「夏が近くにある」と知る。それと同じように、出来事（起こること）を見るとき、「神の支配は近くにある」と知ることが求められている。出来事を「見る」とは、それが何を意味しているかを「知る」ことである。

ⓑ「これらのこと」が8―27節を指すなら、偽メシアの出現や戦乱、ローマによるエルサレム陥落などの歴史上の出来事も神の支配の接近を知るしるしとなる。

⑥解放の時を信じ、神の支配が近くにあることを知って生きる

ⓐ25―28節では、人の子の到来と、そのときに「あなたがた」が取るべき態度が語られる。人の子の到来は「解放」の時の到来である。それを知る「あなたがた」は、将来への不安から解放され、今に集中し、それを大事に生きることができる。

ⓑここでは、ただ救いの時を見逃すなと警告しているのではない。むしろ、人々が恐れて気を失う時にも、キリスト者には希望が与えられていると述べることに重きが置かれている。人の子の到来が解放の時だと知っている者は、この今の生活に注意を集中することができる。キリスト者とは、苦難の向こうにイエスの姿を見て、頭を上げることが許されている人のことである。

ⓒ解放の時を信じる者は神への信頼を生きる者である。だからこそ、たとえ苦難の出来事であっても、それを「見る」とき、それが起こる意味を「知る」ことができる。キリスト者とは、出来事の向こうに働く神の力を見抜く目を持つことのできる者である。